

に木彫部専務に移った〔正しくは予備科木彫担任兼務〕のは纏て彫刻科大革新の前提とも見るべく、彫造部主任に朝倉文夫氏の呼び聲最も高く同氏も既に下交渉を受けた形跡があり條件次第では氏の學校入りが實現されやうが、何分難かしい此科のことで、今の所どう變化するか一寸豫想されぬ

（大正八年四月二十一日『大阪時事新報』）

しかし、この学科課程改正案は翌大正九年二月の工芸部教官會議で普通科一年短縮案へと修正され、また、他科との關係を調整する上で支障が生じたらしく、最終決定は大正十二年の本校規則大改正まで持ち越された。

ただし、上記の記事において指摘されている人事上の改革はむしろ自然に進んだ。金工科では大正八年四月に教授平田宗幸が病気で辞任し、海野清と神矢教親が助教となり、五月、山本正三郎が講師となり、九月、教授海野美盛が死去し、十一月、清水亀藏が教授に起用された。鑄造科では七月に桜岡三四郎が病気で辞任し、十一月、津田信夫が教授に昇格。七月には杉田精二が講師に採用されている。図案科でも今和次郎、齋藤佳三（戸籍上は佳藏）の二人が講師として採用され、工芸部教師の顔ぶれは大分新しくなった。上記の記事中にある彫刻科の改革は大正九年に実施される。

⑤ 今和次郎、齋藤佳三、山本正三郎の起用

装飾美術家協会や工芸美術会が誕生する大正八年は、工芸、デザイン運動が高まりを見せた年であったが、本校にも刷新の機運が興

こり、その手始めとして五月二十二日付で、図案科に今和次郎と齋藤佳三、金工科に山本正三郎が、講師として起用された。大正八年六月一日の『大阪時事新報』に、「新に美術學校に加へた三權威」の見出しで、この三人の起用が紹介されている。

「三氏はいづれも同校出身の逸材で斯學の權威者、齋藤氏は衣服論、意匠學の二科を、今氏は西洋模様學、住宅論の二科を、山本氏は彫金實習を擔任することになつた、右に關し同校幹事大村西崖氏は語る『從來島田教授が擔任して居た圖案法を更に分科して新に講座を設け齋藤今二氏が夫々擔任することになつたのである、齋藤氏の衣服意匠學には世既に定評あり今氏の西洋模様學も亦我邦では氏の右に出る者なしと云ふ程で兩氏共に斯道の權威である、山本氏は特に西洋打出即ちスナールング片切法即ちイングレヴィングにかけては唯一の人である、今回此三氏が同時に教鞭を取られることになつたのは本校に取りて洵に慶ぶべきことである』と（東京電話）」

また、今和次郎の記すところ（『考現学 今和次郎集第1巻』昭和四十六年一月）によれば、

「洋劇、翻訳劇がしきりに流行していた大正末から昭和のはじめにかけてのことだった。上野の美校（現芸大）で、西洋ものの舞台の時代考証、つまり、住居、家具、小道具、衣装などの講義をやつてくれという学生たちの要望に學校が応じて、非常勤講師という格で、あいつならばという声にうっかり私がひっかかってしまったのだ。さあ、それから一〇年間ばかりは、勉強させられたものだった。

た。丸善に通い、古本屋に通い、藁でもつかむ態度でガリ勉をやったものだった。」
という経緯があったようだ。

斎藤佳三は、東京音楽学校を中退後、本校図案科入学、在学中より音楽や演劇にも積極的に関わる多彩な活動を始めていた。斎藤は、二期先輩の今和次郎、斎藤と同期で、のちに図案科の主任教授となる広川松五郎らとともに、伝統工芸産地の子弟養成機能的な当時の図案科の教育に批判的だった（小峰秀夫「秋田の美術家7 斎藤佳三『秋田美術』第七号昭和四十六年一月参照）。ことに斎藤、広川は島田佳矣教授の伝統工芸論に「時代感覚がなく、陳腐な図案職人を作るに過ぎない」と真向から対立しており、斎藤は卒業式を待たずに前年の十二月に卒業制作を提出し、渡欧している。翌大正二年四月にペルリン王立美術工芸学校に入学するが、ドイツ開戦により大正三年十一月に帰朝、兵役を務めた後、本校講師となった。

斎藤の授業について、舞台装飾家の吉田謙吉（大正十一年図案科一部卒業）は次のように記している（『斎藤佳三について中』昭和四十四年八月十五日『秋田魁新報』）。

「僕が東京美術学校の三年のとき、とつぜん斎藤佳三、今和次郎両先生によって、図案科週二回の講義を受け持たれるということになった。―（中略）―当時の図案科の課題なるものは、いっこう僕には意欲がわかなかつた。―（中略）―ところが、斎藤佳三先生が初めて教壇に立たれた時、僕は、僕のデザインに対する意欲が、俄然

よみがえってきた。正直、ほかの科目はなまけになまけていただけ、斎藤先生の講義だけは、一回も休まず出席した。出席したばかりでなく、講義が終わったあとも、勝手に描いた作品を見ていたりする機会を得た。『リズム模様』ということばも、もちろん初めて耳にしたのだが、従来の図案法なるものに、僕自身魅力を感じなかった理由もおぼろげながらわかってきた。」

こうして「リズム模様」論を説き「曲線をオーケストラの曲想とどう結びつけるか」など、総合芸術の理念に根ざした斎藤の新鮮な意匠講座は、若い学生たちを魅了した。

今和次郎は、明治四十五年三月に本校図案科を卒業した後、私立早稲田大学（大正九年に大学として正式認可）で、建築の佐藤功一教授の助手となる。大正三年に私立早稲田大学理工科講師を嘱託され、翌年から同科助教（のちに教授）となる。大正六年に、柳田国男、石黒正忠らの「郷土会」に呼びかけ、民家の研究会を発足させて、翌七年からは郷土会のメンバーとして全国の農村調査を開始した。また、同年東京美術学校講堂で開かれた建築学会大会では、「都市計画の心理的基礎」の演目で講演を行なっている。大正十一年『日本の民家』を刊行。民家に見られる自然発生のデザインに着目し、当時の形式主義の住宅論や懐古趣味としての田園志向を鋭く批判した。今の研究活動は、民家、服飾、家政など多岐にわたるが、なかでも震災後の復興する都市風俗を記録しようと始めた「考現学」は、後世に多くの影響を与えた。昭和五年に刊行した吉田謙吉（先出）との共著『モデルノロジオ・考現学』はベストセラーになった。

山本正三郎は、明治三十年七月、本校彫金科卒業。明治三十二年に出身地香川県の高松市で美術工芸品製作工場を起こし自営するが、明治三十五年八月、金属美術研究の目的でニューヨークへ渡航する。銀器で知られたゴーハムの製作工場などで実際の仕事に従事しながら研究を続けた。ロードアイランド州立図案学校夜間部にも一時籍を置いた。明治三十七年から四十年まで豊商務省海外実業練習生。四十一年に帰朝し、東京府立工芸学校教諭となる。各種工芸美術展で受賞、東京勸業展覧会などの審査員を歴任。また、独自に工場も運営、大札記念の各種献上品の製作にもたずさわり、その実力が広く知られることになった。

⑥ 装飾美術家協会

柱人社(738頁)の運動を社会的な立場に持っていかうと結成した一つの団体が装飾美術家協会である。結成のための第一回の会合は、高村豊周の自宅で、岡田三郎助や長原孝太郎も参加して開かれた。会の名前は議論百出、結局、語弊もあるが岡田三郎助発案の装飾美術という語を用いることになり、大正八年六月、装飾美術家協会を結成。同年十月、第一回展を神田神保町の兜屋画堂で開催した。出品者は、岡田三郎助、渡辺素舟、長原孝太郎、藤井達吉、原三郎、西村敏彦、今和次郎、斎藤佳三、広川松五郎、高村豊周の十名で全員会員であった。出品作品は全部で三十一点でそれほど大作はなかったが、大新聞が紹介するなど華々しい反響があった。全七十二頁の展覧会目録を作り、最後に会則を載せている。その第一章に「本会は芸術品(OBJECT D'ART)を制作発表し、従来の所謂工芸美術品

の品位を高め、その帰趨を示すことを以て目的とす。」と書かれている。翌大正九年に、資生堂の二階で第二回展を開催し、第一回におとらずジャーナリズムの注目を集めるが、それ以後展覧会は開かれていない。事務能力の不足から自然消滅してしまった装飾美術家協会ではあるが、この二回の展覧会の成功は、沈滞気味だった当時の工芸界に新しい気運を呼びおこすことになった。

⑦ 東京高等工芸学校設置決定

安田祿造らの運動(69頁)が効を奏し、大正八年に東京高等工芸学校新設が決定し、左記の報道が示すように設立準備が始まった。

○工藝教育振興

工藝校委員任命

文部省に於ける高等教育機關擴張計畫に基き大正八年度以降三ヶ年の繼續にて東京芝浦埋立地に創設すべき高等工藝学校は其の目的とする處我國現在の工業界に最も缺乏を感じる工業技術家の養成と民間事業の指導啓發を計り以て化学的工業の發達を期すると共に技術的工業部工藝的産業を振興せんとするに在りて其の學科目も工藝圖案工藝彫刻金屬工藝木機工藝塗料工藝印刷工藝等の六科目を併設するに在りて豫て創立委員銓衡中なりしが廿日左の如く任命されたり

東京高等工藝學校教授工學博士 吉武榮之進

同上 安田 祿造

同上 秋保 安治